



親だからこそ気付く我が子のわずかな成長に、幾度となく胸のときめきを感じたことがきっとあると思います。障害のある子どもたちが、もてる能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し、社会参加できるよう、その基盤となる力を身につけるため、放課後等デイサービスでは療育を行い、学校では自立活動や交流及び共同学習が積極的に推進されています。そこで、今回は、「じりつ」ということについて、考えてみたいと思います。

子どもたちが発達過程の中で、人に頼らず、自力で何かができることを「じりつ」といい、漢字で書くと「自立」と「自律」があります。前者の「自立」は、つまり立ちや食事、積み木遊びのように身体的機能の発達によって自力でできることをいいます。一方、後者の「自律」は学校に行くことなど、自身の規範に則り、自力でできることをいいます。「自律」は、自己判断、自己決定など価値観、信念の成長も伴い、発達過程では少し、上の年齢になります。「自立」も、乳幼児期の身体的自立、学童期の技能的自立、さらに青年期の経済的自立まで、発達段階の過程の中で成長していきます。

心理学者ヴィゴツキーは子どもの知的発達の「自立」を、「成熟」という言葉で示し、成熟していない、しかし成熟しつつある過程の領域のことを、「子どもの発達の最近接領域」として表しました。

ヴィゴツキーの研究は、次のような内容です。子ども二人（Aさん、Bさん）に同様の問題を解かせ、同じ知的発達水準であることを確認します。この年齢が8歳児の問題だったとしたとき、次に二人の8歳児に発達水準より上の問題を、いくつかの方法で示します。①問題をどのように解くべきか説明をしたあと、子どもたちが真似てできるかどうか。②大人が問題を解き始めた後、その方法を見ながら子どもにも同様にやるように指示し、子どもができるかどうか。③その子どもより知的発達水準の上の子どもと協同で問題解決させるように指示し、子どもができるかどうか。④最後に子どもに問題解決の原理を説明するように指示し、子どもができるかどうか。このように知的発達水準より上の問題をいろいろな協同の方法で解くことを子どもに求め、知的協同の可能性を観察しました。ヴィゴツキーは、知的協同がその子どもにとって、どれだけ発達を広げるか、知的年齢の限界をどれだけ越えられるかを明らかにしました。

ヴィゴツキーは「子どもの発達の最近接領域」を子どもが助けを借りればできる領域のこととして示し、子どもがもつ知的協同の可能性として着目しました。一人の子どもは8歳以上の12歳の年齢に相当する問題を協同で解決しました。発達の最近接領域は、その子どもの知的年齢を4歳も追い越しました。一方の子どもは9歳までしか協同で進めることができませんでした。二人の類似は成熟した機能の分野に限られますが、実際の発達水準は同じでも、二人の子どもは成熟しつつある過程では、明らかに異なります。同様に知的年齢が8歳に満たない6歳相当の発達の子でも、知的協同の可能性、子どもが助けを借りればできる領域（発達の最近接領域）が広がれば、知的年齢は6歳でも、12歳相当の発達の可能性を示します。

このようにヴィゴツキーが着目した発達の最近接領域、知的協同の可能性を追求することこそ、教育がもつダイナミックな営みと言えるでしょう。子どもたち一人一人がもつ知的協同の可能性を見つめて、どのような教育、養育、支援ができるのか、さらに、「自立」「自律」を促す周囲の人たちの助けを、みんなで考えていくことが大切になります。

学校教育では、特別支援教育において自立活動や交流及び共同学習としてカリキュラムに位置づけられていま

す。ここでは、子どもたちの個人因子よりも環境因子でも自立を促進することがうたわれています。これは、子ども自身が「自力でできる領域」を広げることにつながります。

これからも、子どもたちの可能性を、皆さんと一緒に見つめていきたいと思います。

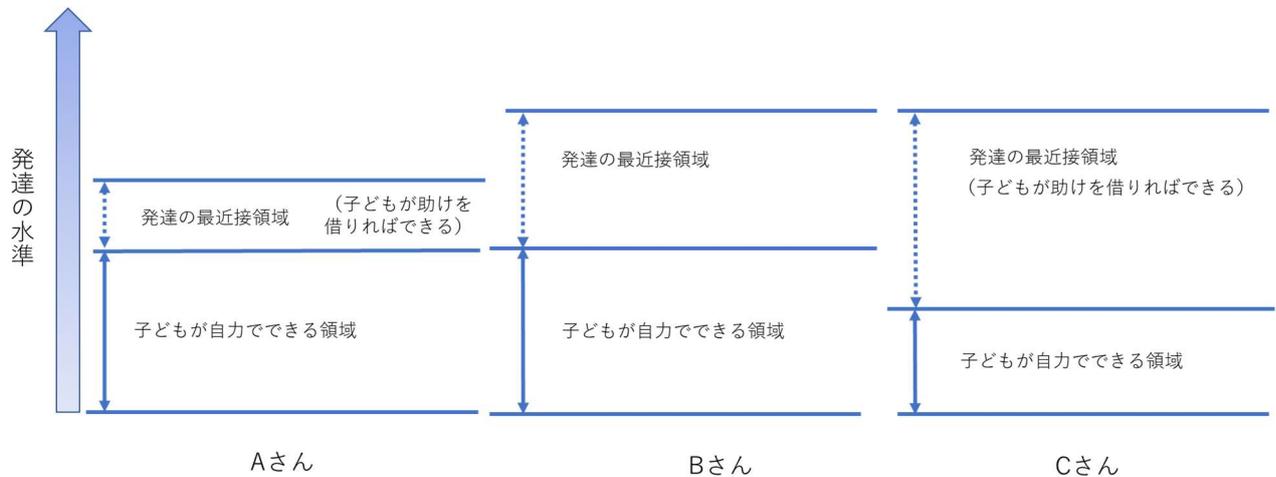


図 発達水準と発達の最近接領域

参考文献：

ヴィゴツキー著 柴田義松訳代表『新児童心理学講義』新読書社 p37-42

荒巻 恵子（あらまき けいこ）

帝京大学大学院教職研究科教授

子どもたちとの出会い、先生がたとの出会い、保護者との出会い。たくさんの出会いの中で、人が豊かになるのは、学校という場が、すべての人の学びの場であるためだと思います。インクルージョンが問われている多様性社会の中で、次代を生きる子どもたちの未来を、みんなで考えていくことは、現代を生きる私たちの使命です。先人たちと同様、いつの時代もよりよく生きるという「ウェルビーイング」を追究していくとき、教育の意義が見えてくると思います。皆さんとともに、一緒に考えていきたいと思います。よろしくお願い致します。